

山本一清と W.M.ヴォーリズ

富田 良雄

出合い

天文学、宗教、政治、文化において幅ひろい活動をつづけた山本一清の生涯に、一番大きな思想的影響をあたえた人物は誰だろうと考えてみると、それはウィリアム・メレル・ヴォーリズ (1880-1969) だという結論にたどりつく。ヴォーリズはコロラド大学建築科に在学中にカナダのトロントで開催された学生義勇軍大会に出席し、中国で活動している女性宣教師の講演に大きな感銘を受けた。そして大学卒業後、伝道の困難な地域への使命をおびて近江八幡の商業学校に英語教師として赴任するため 1905 年日本へやってきた。ヴォーリズが膳所中学にも英語教師として週に一度教えにきていたおりに、在学中だった山本はその聖書クラスに参加し鮮烈な印象をもった。山本は第三高等学校に入学後、京都の平安教会にて洗礼を受けた。その後、若き山本は YMCA と日曜学校の活動を通じて、キリスト教の宣教活動を精力的におこなうことになる。その名残として当時出版されていた各種聖書や讃美歌集が百冊あまり残されている。三高のキリスト教青年同盟 YMCA を拠点に全国との交流をはかりながら、毎年開催される夏季学校にも参加した。そこには必ずヴォーリズの姿もあった。京大を卒業後、水沢緯度観測所に赴任した 2 年間も、日曜日毎に水沢教会を中心にして近隣の町々を駆け巡りながら説教と讃美歌の指導をおこない宣教師のような活動を続けている。



YMCA 夏季学校 (1917 年、御殿場) における「滋賀県人」。前列向って左から岡本、吉田、山本、ヴォーリズ、高野；後列は河原、末次、？

天文学とヴォーリズ

1919 年頃から山本の表立った宗教活動は控えめになる。京都大学宇宙物理学教室の助教に昇任して天文学の本務に時間を集中する必要がでてきたからである。



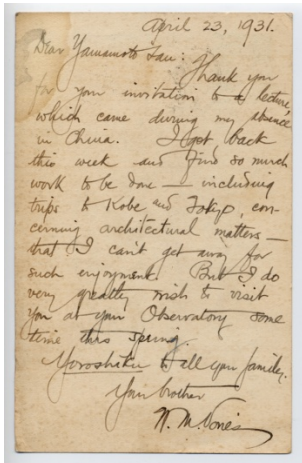
大正9年(1920)の『天界』の裏表紙に掲載された近江セールズ株式会社の製品広告

1922年から3年間にわたる欧米留学に先だち、同年8月に山本夫妻は軽井沢に滞在していた。なぜ軽井沢なのか。軽井沢は明治中期から外国人宣教師の避暑地として開発がはじまり、大正年間には多くの外国人が別荘をかまえ、夏季には海外からも外国人が避暑に訪れ情報交換の場になっていた。ヴォーリズも日本にやってきた当初から軽井沢を訪れており、後に建築事務所を開設し、夏季は職員とともに軽井沢でしごとをしていた。山本はヴォーリズをはじめこうした外国人と交流しながら欧米留学のための情報をあつめていたのであろう。



軽井沢の写真館で撮影された山本夫妻の写真と、実家での親戚記念写真。前列左から母(察子)、次男(修)、一清、英子、長男(進)、祖母(瀧子)、後列左から妹(美記子)一家、父(清之進)、妹(愛子)一家。

山本資料にヴォーリズから一枚のはがきが残されている。1931年4月23日付のもので、山本が企画した天文講演会への案内に対し参加できないことを伝え、かわりに完成したばかりの花山天文台への訪問の希望をのべている。掲載するはがきの文面は、ながれるようなペン遣いである。右の写真はその2年後の1933年5月8日にヴォーリズ夫妻が花山天文台を訪問したおりのもので、本館のバルコニーで撮影された。写っている人物は向って左から川崎(山本夫人の弟)、山本夫人、ヴォーリズ夫妻、山本、宮家である。川崎は当時水沢緯度観測所長を勤めている。



天文講演会欠席と花山天文台訪問の希望を伝えるヴォーリズのはがきと、花山天文台を訪問したヴォーリズ夫妻（1933年）。

この訪問の翌年に、今度はヴォーリズから依頼を受けて山本が近江八幡の青年学校で天文講話をおこなっている。その講演を聞いたヴォーリズが山本におくったのが次の天文詩である。

When midst the mazes of the firmament,
I roam in fancy world on shining world, ---
In doubt these myriad solar systems hurled
At random, without plan or fixed intent,
Could spin so long with forces still unspent
And never orbit clash, --- anon I find
My inmost being to one concept bent:
That naught is puppet vain of Chance purblind,

But out and on, beyond the farthest flights
Of man's imagination --- whence, the lights
Our eyes behold began their journeys here
Uncounted eons past --- from sphere to sphere,
One Law thruout the boundless realms of space;
One Power doth hold the Universe in place.

3/9/33

（『天界』第160号、1934、掲載）

ヴォーリズが1938年山本に寄せた著名な火星観測者ローウェルとピケリングに関する英文の文章がある。子供のころに建設途中にあったローウェル天文台で遊んだことや、ジャパノロジストとしてのローウェルの人柄などについて述べている。この文章は山本進（山本の長男）によって和訳され『天界』第207号（1938年7月）に掲載されている。文末に

英文（原文、資料番号:2-Swall-18）を資料として再掲載する。

生涯にわたるキリスト教信仰

山本もヴォーリズも後進の若者に気をかけていて、先にも述べたように毎年開催されるYMCAの夏季学校にはできるかぎり参加していた。戦前のころは御殿場の東山荘で毎年開催されていたようである。忙しかった二人であるから一緒になる機会は多くはなかったが、つぎの記念写真には両名そろって写っている。山本が欠席した第46回には子息の山本進が参加している。



毎年御殿場東山荘にて開催された基督教青年會夏季学校における山本とヴォーリズ。左が第45回（1935）、右が第49回（1939）である。下段は両氏が写っている部分をそれぞれ拡大表示した。

山本の蔵書の中に幸徳秋水の『基督抹殺論』という本がある。山本が受洗して2年後の1910年、ハレー彗星がやってきた年の1月、幸徳ら数名が大逆事件により処刑されるという事件があった。山本にとって幸徳の問いかけは大きな衝撃であったにちがいない。山本の日記によれば学生時代には、東大のキリスト教青年同盟と共同してさまざまな活動をおこなっていた。富士五湖で企画した夏季学校においてボートに乗っていた仲間が溺死するという事件も起こった。人生に深い思いをいだきながら、強い連帯をきずいていったようだ。この時期のつながりが、戦後山本が本格的に東亜天文学会の活動で全国を講演してまわる時にも続いてゆく。日曜日には必ず講演先の教会を訪れて日曜礼拝に出席し、説教を

行うこともあった。そして知り合いの牧師館に泊めてもらうことも多かった。

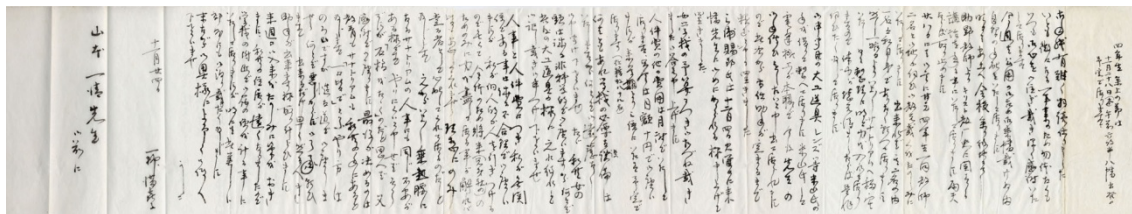
建築家ヴォーリズ

ヴォーリズは自身のことを「自給伝道者」と称していた。会派から給料をもらい資金援助も受けながら派遣された宣教師や伝道師ではなく、自ら現地において事業を起こし活動費を稼ぎながら布教を行った。開拓者精神にあふれた人物であった。建築学の専門を極めたわけではないが、日本人の生活スタイルの西洋化に合わせ、シンプルで機能的な洋風建築を現地の自然と人々の生活に依拠しながら設計を行い建設した。教会堂、学校、病院などその数はゆうに千をこえる。その温かみのある木造建築や、シンプルで華美にはしない石造建築は今も愛され続けている。

おそらく山本もこうしたヴォーリズの開拓者精神にはげまされ、自らも天文学普及の分野での自給伝道者をめざしたのだろう。それはまたハーバード留学中に親友になったシャプレーの考え方も共通している。山本が1941年に建設した田上天文台の研究棟にも、バルコニーが1階2階と張り巡らされ、2階のバルコニー床をささえるななめの腕木にはヴォーリズの意匠が感じられる。

近江兄弟社学園と山本一清

ヴォーリズは一柳子爵家の娘満喜子と1919年に結婚、1941年には日本国籍を取得し一柳米来留となつた。戦時中さまざまな苦難をなめたが、戦後の日本復興のために尽力したことは知られている。山本との友情は生涯かわることはなかった。満喜子は女子高等師範附属女学校に学び、米国に留学した経験から近江兄弟社学園の設立と運営に情熱を注いだ。



満喜子夫人から1946年11月24日に山本に送られた、近江兄弟社女子中学の教育に関する手紙。

終戦後、満喜子から山本に2通の手紙が届いている。山本はそれを一つの封筒にまとめて収納し保管していた。いずれも近江兄弟社学園女子中学の教育に関するもので、山本が理科科目を教えることもよいと申し出たことがきっかけのようだ。1通には8月31日と文末に日付が入っており、封筒の消印と一致する。しかし2つの消印ともインクがかすれていて年が読み取れない。封筒に貼られている10銭切手3枚という情報から調べてみると、封書が30銭の期間は昭和21年7月から22年3月までである。したがってこの手紙は昭和21年8月31日に書かれたことが判る。もう一通のほうは本文末に11月24日としたためられているが封筒がないので消印情報がない。文頭の走り書きに生徒をつれて田上天文台へ11

月 28 日（木）にお伺いします、とありこの日付が木曜日にあたる年は 1935、40、46、57 年なので、1946 年（昭和 21 年）である可能性が高い。つまり先の手紙と同年にそのあとに書かれたものということになる。

ここまで年月が判明したので、山本の日記にあたってみることにする。幸い昭和 21 年（1946）の日記はかなり密に記されている。山本は昭和 21 年 4 月の衆議院選挙に 1 月 18 日の時点で立候補を表明して選挙活動を行ったが落選。翌年 4 月にも再び滋賀県知事選挙に立候補するわけで、そのあい間の期間に近江兄弟社の教育にもかかわっていたことになる。日記によると 9 月 9 日と 27 日に近江八幡の満喜子夫人を訪問し教育方針について相談し、10 月から 12 月にかけて今でいう集中講義を 9 回おこなっている。翌昭和 22 年の日記には正月早々から風邪をひいて八幡行きを断念したが、1 月下旬から 3 月上旬にかけて 5 回にわたってでかけているので、この年度は都合 15 回の集中講義をおこなったことになる。各回近江八幡に 1 泊 2 日または 2 泊 3 日ででかけ、2 日間の講義を行っている。1946 年から 1955 年にかけての日記から拾い出した近江兄弟社学園への出講回数と入学式、卒業式、祝典などでの記念講演会、クリスマス会などに出席した状況をまとめると次のようになる。

年度	前期	後期	その他
1946		15	2
1947	11	16	1
1948	9	5	2
1949		1	3
1950		6	2
1951			5
1952			2
1953	1		
1954			2
1955			1

このうち、1946 年から 1949 年の出講は、各回が近江八幡の兄弟社の寮や一柳家などに 1 泊ないし 2 泊しての授業であったが、1950 年は 2 日ないし 3 日つづきの毎日日帰りの出講となった。またその他の項目では、鳥羽への修学旅行に同行したり、大坂プラネタリウムの見学に引率したり、七夕講演など様々な要請にこたえている。また課外授業として田上天文台見学、天体観望も行われている。1950 年代になると山本の兄弟社学園への出講はなくなる。これは東亜天文学会の運営と天文学研究が多忙となったせいであるが、学園のほうでも新制学制への対応が安定してきたからでもあろう。一方で一柳家との個人的なつきあいは山本が亡くなるまでとだえることはなかった。

夫人とは教育についての意見が一致し、上記手紙は生徒を実習で田上天文台見学にひき

うけたときの内容である。夫人の手紙は整った美しい書体で、くずし字ではあるが読みやすい。入力したものを文末に資料として掲載する。

今年はヴォーリズ没後 50 年にあたり、近江兄弟社からはヴォーリズ伝が新たに出版され、ヴォーリズの手がけた建築の再評価の動きが全国的に高まっている。

参考文献

- ・ヴォーリズ、『吾家の設計』、文化生活研究会、1923、(資料番号：3-39-27)
- ・ヴォーリズ、『一粒の信仰』、春秋社、1930、(資料番号：1-124-7)
- ・荒川久治編、『教会が見える風景』、地域デザイン研究所、1995
- ・石田潤一郎、吉見静子、池野保、『湖国のモダン建築』、京都新聞出版センター、2009
- ・グレース・N・フレッチャー、『メレル・ヴォーリズと一柳満喜子』、水曜社、2010
- ・宮本ユカリ、近江兄弟社・湖声社編纂、『漫画 W.メレル・ヴォーリズ伝』、サンライズ出版、2014
- ・ヴォーリズ、岡田学編、『神の国の種を蒔こう』、新教出版社、2014

RECOLLECTIONS OF DR. PERCIVAL LOWELL
AND DR. W. H. PICKERING

In the 1890's my brother and I were boys in our early 'teens in Flagstaff, Arizona, U. S. A., when the Astronomer Percival Lowell built his Observatory there. The reason he chose such a remote and small town was because of the very dry, pure air, which make the night sky exceedingly clear and the stars especially visible; also the infrequency of rain means little obscuring by clouds. Flagstaff is located in the northern and mountainous part of Arizona, and is itself 7000 feet above sea-level. Our family went there in search of health a few years before Percival Lowell went there in search of stars.

During the building of the Observatory and of the roadway up the hill (or "Mesa") upon which it stands, my brother and I spent many Saturdays during school time, and many vacation days, watching the work progress.

My early interest in architecture led me especially to observe the construction of the Observatory. I well remember the deep hole, blasted from the solid rock of the hill, in which was set the massive base to support the telescope. Our interest in the road-making lay in the fact that the work was being done by the father of two of our school mates, and these boys helped him during the holidays. Whether we ourselves helped or hindered by our presence, I am in doubt; but at least we enjoyed watching and we learned something about grading and draining a mountain roadway.

Mr. Lowell became a great personage in our small town. He was, of course, too much absorbed in his work to be a very "sociable" man in the ordinary sense. But also he was far from being a provincial New Englander who spoke "only to Cabots." His scientific mind and his wide travels had made him a world citizen. The most lasting impression he made upon my boyish mind was rather an odd mixture: I thought of him as both exceedingly dignified and as a sort of "jumping-jack"! (a jointed wooden doll which bends freely at the joints when a string is pulled). The first half of the impression was due to his general appearance as a cultured gentleman; the second to the way in which he bowed very deeply, removing his hat, to both ladies and men when he met them on the street. We "Westerners" were accustomed to remove our hats only to ladies and to bow to no one. When I remarked about Dr. Lowell's excessive politeness, someone told me that he probably learned that during his visit to Japan. I believe that that was my very first information about Japan! So perhaps Lowell Observatory played some part in setting my feet toward my future home.

Professor Pickering came out to Lowell Observatory from Harvard University, to

pursue his studies of Mars, - a subject in which both he and Dr. Lowell were especially interested.

I remember how our local weekly newspaper kept us excited with startling suggestions the Lowell Observatory had discovered proof of life on Mars; the farms were discernable, with irrigating canals and vegetation greening in the Martian spring; and such interesting speculations. I remember how the people used to be invited to visit the observatory on certain nights and how I got my own first view of the moon and of Saturn's Rings thru the Lowell Telescope.

Mr. Pickering and Mr. Douglass were both at Lowell Observatory for some time. They were younger men than Dr. Lowell, and were often at the homes of our friends and in our own home, so we got to know them better.

Dr. Douglass later became famous for his work at the University of Arizona (where he still is) on the discovery of weather cycles by means of tree rings in ancient timbers in prehistoric cliff dwellings in Arizona. I have seen him in recent years.

Dr. Pickering I remember as rather large man, with brown hair and a beard - which latter made him seem somewhat older than he must have been at the time. A very kindly, and soft-voiced gentleman, who seemed to take an interest in anybody and any conversation that he came across. He gave the feeling of deep scholarship and yet of a warm personality to even a youngster like myself.

Dr. Lowell seemed more aloof; and I could understand this aspect of his great character when I visited his tomb - beside his Observatory - in 1925, on one of my later visits to Flagstaff. There is inscribed a quotation from his own writings, the exact words of which I cannot recall, but the meaning of which is that he who would study deeply into astronomy must be prepared for a lonely life. That is equally true of all prophets and pioneers who sacrifice their personal comfort and advantage in order to make the world better. Percival Lowell gave not only his time but he paid his own salary and built his own Observatory out of his personal fortune. He was a scientist for the love of Truth, without any profit-motive. He may have been lonely as far as contemporary associates were concerned, but he belongs to the greatest company of all - the Makers of History.

(signature)

Wm. Merrell Vories

April 19, 1938

四年生参上の節は

十一月二十八日（木）午前六時半八幡出發の
予定で居ります

御手紙有難く拝読仕りました

いとも微々たる学業のため勿体なくも
いつも御心を御注ぎ戴き深く感謝いた
して居ります

今週は公用の御ため御来幡戴けぬ由

自習の手配をいたして居ります

時々安土へ全校集り彼地にて

助野教師よりキリスト教歴史に関はる

講話を承る事にいたして居ります雨天
ならば取り止めます

廿八日にも御言に甘え四年生一同教師

二名と御地に伺い御教え戴くをたのしみに

いたして居ります 出来ればこの二名の内

一名は私自身でありたく願って居ります

然し一昨日よりいよいよサナトリウムへ移宅

いたし居り整理に時と力を入れて居り

ますので体力が堪え得ましたらば是非

伺ひたく存じて居ります

御申し付けの大工道具レンズ等米山氏の

手を借りて整へて居ります 米山氏は

電気械工が本職で今度先生の

御手伝ひをしたいと申し出て居られます

ので此次から常任助手が定まるまで

転出と申して置きました

三浦賜郎氏は十二月四日火曜日に来

幡先生に御めにかかれる様申し上げて置きました

女学校の予算につき御たづね戴き

ました御答え申し上げます

人件費の他の費用は月謝でいたして

居ります 只今は月額十円で御座い

ますが来学期より三倍にいたす予定で

居ります（在籍数八十八名）

何はともあれ学校の必要な設備は

いたしますから何とぞ御遠慮なく

御申し付け下さいませ ただ私共女の

頭は誠に非科学的で御座いますから何とぞ

此度の大工道具の様に之れ彼れと

御記し戴き御申しつけ下さいませ

人事と人件費につき私が無関

係である事は誠に不合理で御座い

ますが 私が個人的に人を引きつける

ので無くて今後のため将来（兄弟社の）の

ためのみに丈に尽して居る事が解れば

皆も安心してくれませう理屈にのみ

走る者として心配してられるのは のだと

存じます 之からいよいよ乗越腰に

なるサナトリウムの人事にも同じ不安が

ある様です やりにくいと申せばそう

ですが「石橋をたたく」のだと思へば又

感謝で御座います 最後に決めるのは

教育もサナトリウムも私共の手にあると

存じます 「一々皆で」といふやり方は

のろいですが慥な道で御座いま

せう 何とぞ悪しからず御了承願ひ

ます 出来るだけ早く然るべき

助手が出来ます様取り計らひます

来週の御入来をたのしみに筆をおき

ます 私共の住居が遠くなりましたので

学校の付近で御宿の便を計る事に

いたして居りますが時には出来れば

郊外にも御泊り戴きたく存じます

末ながら御奥様によろしく御伝へ

下さいませ

かしこ

十一月廿四日

一柳満喜子

山本一清・W.M.ヴォーリズ年譜

西暦	年号	山本一清	ヴォーリズ	年齢	年齢
1880	明治13		10月28日、米国カンザス州レブンワースに生まれる	0	0
1889	明治22	5月27日、滋賀県栗太郡上田上村に生まれる		0	
1900	明治23		イーストデンバー高校卒業、コロラド大学入学	20	
1902	明治35	膳所中学校入学	学生宣教義勇軍大会出席(トロント)	22	
1904	明治37		コロラド大学卒業	24	
1905	明治38		近江八幡の商業学校英語教師として赴任、軽井沢訪問	25	
1906	明治39	ヴォーリズの聖書クラスに参加	膳所中学、彦根中学で英語を教える	26	
1907	明治40	3月膳所中学校卒業、9月第三高等学校工科入学	2月、八幡キリスト教青年会館建設	27	
1908	明治41	6月23日、平安教会にて西尾牧師より洗礼を受ける	建築設計監督開業(京都三条YMCA会館にて)	28	
1910	明治43	第三高等学校卒業、9月京都帝国大学理工科入学	ヴォーリズ合名会社設立	30	大逆事件、朝鮮併合
1912	大1	ザートルハウス7時導入、ハレー彗星回帰	『湖畔の声』創刊、軽井沢に自分のコテージ建設	32	
1913	大2	ヴォーリズからの呼びかけ文 3通(4月～6月)			
1914	大3	京都帝大卒業、同大学院入学、12月14日結婚		24	
1915	大4	4月京大助手、5月水沢緯度観測所嘱託		25	
1916	大5	長男進誕生、4月京大講師		26	
1917	大6	5月京都にもどる、7月-9月関東重力測定行	軽井沢に夏期事務所開設	27	
1918	大7	YMCA夏季学校参加、8月-9月関東重力測定行	YMCA滋賀県人として写真に写る	28	
1919	大8	6月9日鳥島日食観測、10月助教授	近江療養院開設、近江キリスト教慈善教化財団設立	29	
1920	大9	伝道活動激減、7月新潟重力測定行	一柳満喜子と結婚	30	
1921	大10	5月-7月新潟重力測定行、9月天文同好会創立、 『天界』創刊、ブラッジャヤ10時導入	近江セールズ株式会社設立、メンソレータム販売	31	
1922	大11	6月山陰流星群観測行、7月浅間重力観測行 『星座の親しみ』出版、宇宙物理学科新設		32	
1923	大12	7月浅間重力測定行、夏軽井沢滞在		33	アインシュタイン来日
1924	大13	9月、欧米留学に出发、夫人同行		34	
1925	大14	ラジオ製作に夢中、3月サートンと会う		35	
1926	大15	3月帰国、4月京大教授就任、7月理学博士		36	
1927	昭和2	宇宙物理学教室(京大天文台)建物新築		37	
1928	昭和3	倉敷天文台竣工		38	
1929	昭和4	6月満州、11月台湾、クック30cm導入		39	
1930	昭和5	12月カルバー46cm購入		40	
		12月台湾		41	
		5月スマトラ日食観測、花山天文台竣工		41	『一粒の信仰』春秋社を刊行
				43	関東大震災 藤井天文台竣工

1931 昭6	ヴォーリスからの手紙、花山天文台訪問について	42	51
1932 昭7	中村要死去	43	52
1933 昭8	6月第5回太平洋学術会議参加(カナダ)	44	53
1934 昭9	12月日本学術協会総会参加(台湾)	45	54
1935 昭10	4月台湾、7月IAU黄道光委員会委員長、10月朝鮮、満	46	55
1936 昭11	6月オムスク日食観測、	47	56
1937 昭12	3月勲三等、6月ペルー日食観測、黄道光観測所設立 花山天文台台湾出張所完成	48	57 上海事変
1938 昭13	5月、依願退職、8月IAU総会出席(ストックホルム)	49	58
1939 昭14	3月ー6月満州、華北 12月愛生園訪問	50	59
1940 昭15	10月田上天文台建設開始	51	60
1941 昭16	9月台湾日食観測	52	61 太平洋戦争開戦
1942 昭17	愛生園天文台建設の相談にのる	53	終戦
1945 昭20			
1946 昭21	4月衆議院議員選挙立候補、落選、近江兄弟社へ出請	57	66
1947 昭22	4月滋賀県知事選挙立候補、落選、近江兄弟社へ出請	58	67 新憲法実施
1948 昭23	9月上田上村村長に就任	59	68
1949 昭24		59	愛生園天文台竣工
1951 昭26		65	71 朝鮮戦争
1954 昭29	7月「学生の時間 天文台」大阪中央放送局より	66	74
1955 昭30	山本天文台に改名	67	75
1956 昭31	アナイ教と連携	68	76
1957 昭32	1月「人工衛星について」ラジオ放送 9月三五教中央天文台竣工、井本氏から暦算局へ手紙	69	77
1958 昭33	4月鹿児島日食観測		78 スプートニク衛星
1959 昭34	1月死去(69才)		79
1960 昭35			80
1961 昭36			81
1964 昭39			84

(注)

山本とヴォーリスの接点
山本のキリスト教伝道活動期
近江兄弟社へ出請
アナイ教と協力